

# 草庵仏教

第236号  
(発行日)

2010年2月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 聖典共学会――毎月6日。

午後7時より。

\* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

## 僣慢の頂きに法水流れず

私たちは凡夫であるかぎり、だれでも六大煩惱といつて、貪・瞋・痴・慢・疑・悪見という大きな煩惱をもっていらるといわれている。その中で「慢」というのは「高ぶる心」(慢心)「他と比較する心」を意味する煩惱である。

ところで、学校で学び、高等教育を受け、あるいは今日のようマスコミで毎日いろいろな情報が山ほど入って、いろいろなことを知ってくる、次第に慢の煩惱が増大してくるようになると思われる。「俺はものをよく知っている」「私はそのことがよく分かっている」といういわゆる「我かしこし」という思いが強くなってくる。

人間はいろいろなことを知ったり、学んだりすると、僣慢になりやすいのだと言えよう。

明治時代以前なら、学問をする人は支配層とか僧侶などで、彼等が知識人であり、あ

との農民とか漁民とか職人層は、学問がしたくても学ぶ機会が極めて限られ、またそのゆとりもなかった。だから、生活に必要な知識以外のことは知識人から教えてもらう外なく、自分たちは物事をよく知らないという気持ちがあつて、「お上」や僧侶などの言うこともある程度、頭を下げて聞いていたのであろう。

だから僧侶から仏教の話を聞いて、「へそういうものなんだ」とわりと素直に受け入れていくこともできたのではなからうか。

ところが、現代は、知識を得る機会はほぼ均等で、だれにでも開けている。しかも、新聞やテレビやインターネットなど、さまざまな処から得ることができると。

こうして物事をたくさん知ることができるようになると、「私もけっこう物知りだ」と思うようになってくる。そしていろいろな社会の出来事にたい

して「私はこう思う」とか「ああいつているが私はそうは考えない」というように、皆が小さな評論家のようになってきた。

知識とか教養とか情報をたくさん知ることには悪いことではないし、生活をいとむ上で役に立つことも多いである。

しかし、知識や情報が増えることは、それによつて「慢」の煩惱を増大する縁になる場合が多い。

そうになると、仏教の話を聞いても、「私はものをよく知っている」「我賢し」という思いが強いから、仏教の話も情報の一つぐらいにしか考えない。「仏教もそれも一つの考えだ」とか「仏教もなかなかいいことをいうじゃないか」とか、悪くすると「阿弥陀さんとか極楽浄土というよなもの」は昔の人の考えたもの「ぐらいにしか受けとらなくなる」。

中には、仏教はこうである、キリスト教はこうである、天理教はこうである、イスラム教はこうであるという風に、やや専門的な宗教知識を持っている人もある。しかし、彼にとつてはさまざまな宗教は展覧会の展示作品のようなもので、それらをただ眺めて批評しているだけで、自分がそれに帰依しているわけではない。展覧会場の絵は自分の所有している絵ではないように、宗教の知識はあつてもそれは単なる教養や雑学であり飾り物でしかない。

ところが、こういう現代人も自分の無知無能、愚かさに気がつくときがある。

それはいろいろな悲しいことややりきれないことによつて、もがくより仕方がないようになつたときである。昔から子供を亡くすとか、大きな病気をするとか、失恋するとか、生計に行き詰まるとか、そういう出来事にぶつかる、自分の今までの知識や教養などはふつとんでしまつておたおたし、「へいつたい私はどうしたらいいのか」という壁にぶつかる。そういう時に自分の無知無能さが身に浸み

てくるのである。

また、そういう逆縁にあわずとも、どんな人も人生の足もとに目をむけると、自分自身が本当は、全く分からない不透明な中に置かれている存在であることが知られてくる。

人生の足もとの問題とは、端的に言えば「私はどこからこの世に来て、私自身は何であり、そしてこの人生が終われば、私はどこへどうなっていくのか」という問題である。これは決して哲学者とか思想家だけの問題ではない。いやしくも人である限り、人はこの問いの中にあり、この問いに問われているのである。「私はどこから、この世にやってくるのか、生まれ出たのか、分からない」

また  
「いろんなことを知り、話したり、聞いたり、喜んだり悲しんだり、損したとか得したとかいつている、私そのものは一体何なのか。手も足も胸も脳みそも私自身とは思えない。では私とは何なのか、それが分からない」

あるいは、  
「人生いろんなことがあり、

いろんな人と出会い別れていく。やがて身体はむくろになるであろうが、私自身はどこへいくのか、分からない」というような問題である。

私そのものは何であるのか分からないということは、結局人生とは何なのか、分からないということでもある。

ガソリンは1リットルいくらぐらいかとか、今飲んでいく薬は何に効くのかとか、最近の本のベストセラーは何かという類の情報は山ほど知っていて、一番身近な、一番基本のことが丸で分かっていない。

こういうことに気がついてくると、「自分は大事なことは何も知らない、本当に無知な存在だ」と、身に浸みて知られてくる。

こうして自分の根本的な無知さ、愚かさに気がついてくると、初めてブツダ積尊など聖賢の言葉に対して、素直に聞くようになってくるのではなからうか。いわば傲慢心がくだかれてきて、仏の教えに真剣に耳を傾けるようになるのだと思う。(了)

# 正信偈に学ぶ問答

## (二十四)

本願名号正定業

至心信樂願為因

成等覺証大涅槃

必至滅度願成就

書き下し文（本願の名号は正定の業なり。至心信樂の願を因とす。等覺を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり）

現代語訳（本願成就の名号は衆生を間違ひなく往生せしめたまう行であり、至心信樂の願に誓われている信を往生の正因とする。正定聚のくらいにつき、浄土に往生してさとりを開くことができるのは、必至滅度の願が成就されたことによる）

\*

G 「次に至心信樂願為因についてですが、これはどういう意味ですか」

D 「至心信樂の願、その願心が、私たちが仏に成る因（たね）としての信心に為ってく

ださる、ということですよ」

G 「至心信樂の願とは」

D 「それは阿弥陀仏が法蔵菩薩の時に起こされた四十八願の中の第十八願のことです。聖人はその第十八願のことを至心信樂の願ともいわれました」

G 「なぜ至心信樂の願といわれたのですか」

D 「如来法蔵様が、私たちに本願を信じる信心を与えたい、衆生に信心を成就してやりたいと願われたからです」

G 「なぜ信心までも衆生に成就しようとしたのですか」

D 「それは、私たち衆生には、仏になる因としての浄らかな信心が無く、信心を起こすこともできず、自分の力で得ることもできないと見られ、仏になる正当な因としての信心を与えて救いたいと願われたからでありましょう。聖人は衆生のすがたを

一切群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈迷し、衆苦輪に繫縛せられて、清浄の信樂

なし。法爾として真実の信樂なし。

と仰せられています」

G 「私たちが本願名号を信じる力がないために、如来法蔵様は、信心を衆生に与えて救おうと願われたのですね」

D 「ええそうです。第十八願の至心・信樂・欲生我國の三心は如来法蔵様が、私どもに真実の心がなく、清浄の心がなく、純粹に浄土に生まれたというような願心もないことを知り抜かれ、私どもが浄土に生まれる正しき因を、永きご修行によつて南無阿弥陀仏の名号に仕上げられました。そして、この南無阿弥陀仏で間違ひなく（至心）、疑いなく（信樂）、我が浄土に生まれることができるから（欲生我國）、どうかこの本願の名号を信受してくれよと私たちにおすすめに、信ぜしめずにはおかないと誓われた、こういう如来大悲の願心が至心・信樂・欲生の如来の三心といわれています。その三心は衆生に信心を与えて救いたいという願心におさまりますから、十八願を信心の願といわれるのです」

G 「第十八願とは、私たちに

本願念仏を信じる信心を成就したいとの願なのですね。ではもう一度、至心とは」

D 「至心とは、如来法蔵様の真実心のことです。衆生に真実清浄の心がなきゆえに流転し苦悩している私たちの有様を知り抜かれて大悲され、私たちに代わって真実心でもって永い御修行をして下さいました。それによって私たちが浄土に生まれることのできる功德（因）を南無阿弥陀仏の名号に成就して下さい、それを私たちに与えて下さる。その如来の清浄にして真実なお心のことを至心といわれるのであります」

G 「では信樂とは」

D 「信樂のお心は、如来法蔵様が一切衆生を助けたいとの願を起こし、それを実現するために永いご修行のご苦労によつてできたこの南無阿弥陀仏で、私たちが浄土に生まれることが必ずできることに一点の疑いももつておられない、その如来様の金剛の如く堅固な信じ心のことです。私たちが南無阿弥陀仏で助かることに少しの疑いももつておられず、必ず間違ひなく浄土に生まれさせると仰せ下さつ

ています。にもかかわらず私たちはそれを疑つてやまないのです。本当に如来様に反抗し続けているのですね。私たちが疑っていることは如来様の御胸を痛ませ続けているのです」

G 「では欲生我国（我が国に生まれるとおもえ）とは」

D 「欲生我国とは、この南無阿弥陀仏で塵ほども疑いなく浄土に生まれることが出来るから、（我をタノメ、我が浄土に生まれさせるぞ）と、名号となつて私たちに喚びつづけて下さるお心です」

G 「そのような大悲でもつて、私たちに信じてくれよ、信ぜしめずにはおかないとお誓いの願心が至心信樂の願心なのですね」

D 「ええそうです」

G 「ではどのようにして、私たちに信心を成就して下さいのですか」

D 「大悲の願心は、さきほど申しましたように、（汝の助かる種はすべて仕上げたゆえ、汝のありべのままに助けろぞ、助かるぞ）という広大な大悲を（乃至十念・若生者・不取正覚）いわば（ただ称えるばかりで助ける）とま

で表されました。この驚くべきお念仏のお誓いを聞かせていただくことによつて私たちに信心が成就されてくるのです」

G 「如来法蔵様が私たちが浄土に生まれるもとでを全部仕上げて下さつて、悪業煩惱の深い私たちがまるまる救い取ろうとされる、その大悲の働きの深重なることを私たちに知らせんがために、（乃至十念若生者不取正覚）すなわち（我が名を称えよ、助ける）という念仏往生の誓いとして表現されたのですね」

D 「ええそうです。聖人の『淨土文類聚鈔』には

如来の本願、称名に願す

とお示し下さっています。こうして称えているお念仏におき受ける」という大悲のお心をお聞かせいただく。そのことによつて信心が私たちに起こつてくるのです。ですからお念仏を称えながら、そのお念仏のいわれを聞くことが大事です。（我が名を称えよ）の一句には如来法蔵様の深い深いなさけがこもっておりま

G 「私たちに大悲のお心を聞

かして下さいがどうして救いになるのですか」

D 「南無阿弥陀仏の仰せを聞くことは、私どもをこのままに摂取したもう大悲を聞かせていただくことですが、その大悲を聞くと、阿弥陀仏の無碍に届き、私の心が大悲心に摂め取られるからです」

G 「大悲の仰せを聞くことによつて大悲のお心が届いて私たちの心が摂取されるのですね」

D 「ええそうです。本當に不思議なことです。名号を称え、名号を聞き、名号において大悲の仰せを聞くのですが、そういう法の因縁が熟して、大悲の願心が凡心に至り届くのです。如来様の願力のおんもよおしによつて、仏心大悲が届くのです」

G 「我が力によつて大悲の心を得るのではなくて、大悲のお働きにもよおされて、大悲のお心が届くのですね」

D 「大悲の願心は、深くてしぶとくて憍慢で固まっています。私たちの心を照らし、私たちが邪見憍慢のどうしてみよ

やまない無信の者であると、私たちのすがたを知らして下さり、その（救われがたき身こそ、助けずはおかない）という大悲のかけられている身であることを、名号と光明（さまざまな仏縁）のお働きによつて知らされるのです」

G 「助からぬ者を助けたもう如来の大悲が知らされるのですね。そして私に届いた大悲の願心が本願を信じる信心となつてくださるのですね」

D 「ええそうです。至心信樂の大悲の願心が私たちの信心となりたもうのです。阿弥陀仏のお心が凡心に離れなくなるのです。いわゆる摂取不捨の利益にあずかるのです。そして、願心よりたまわつた信心（因）によつて浄土に生まれ、私たちの心が仏心に為らしていただける、とお聞きしています。それを至心信樂願為因と仰せられるのであります」

（了）



手押

# 信心夜話

《松並念仏語録に聞く》二十二

ゴチツクの字が松並さんの言葉。

\*

○南無阿弥陀仏のお誓いが、たしかなら、活いきほ仏の声なれば、唯これだけで十分。この世の事は良からうが、悪からうが、大した事ではないではありませんか、成る様になる。

(この世のどれも人生において確かなまことは、一人一人をご自身のものとしたもう阿弥陀仏がともにいて下さるといふこと。その阿弥陀仏がお念仏の声となつて私にご自身を顕して下さる。このまことにあえば、それ以外のこの世のことは、浮き沈み、良し悪し、いろんなことが起こってくるが、大したことはない。成るようになる。この世のさまざまなくとも、自分の思い通りになつてもならなくとも、この世のことはこの世かぎりのことであり、また仏縁になつて下さる)

○御法話の頂上は「助けるぞや助けるぞや」の弥陀じきじき直々の説法なり。それが南無阿弥陀仏。

(称えよの仰せも、タノメの仰せも、まかせよの仰せも、そのまま来いよの仰せも、その本は「助ける」(助ける)の弥陀

陀じきじきの仰せ。それをそのまま伝える言葉が南無阿弥陀仏。これが最上の法話。お念仏を聞くことが最上の法話を聞いていること)

○私に信心はいらぬ。阿弥陀様の信心一つ、南無阿弥陀仏にて、十方衆生が間違まちがひなく助かると深く信じ給う。これだけでよいのや。阿弥陀様の信心を仰ぐばかり聞けばかり。

(十方衆生はこの南無阿弥陀仏で助かると深く信じて、「大丈夫、大丈夫、この南無阿弥陀仏で助けるぞ助かるぞ」と仰せぬに仰せ下さっている。それなのに、私の方は、これでいいのかしら、確かであるうか、大丈夫だろうか、自分の方に詮索をしている。確かならう、大丈夫と思いたい、何とかしつかり信じたいと、自分の心の世話にかかっている。助かる確かさを自分の中に認めようと思つても永劫できぬ。お助けの証拠はお聞かせの南無阿弥陀仏であり、助けるに間違まちがひないと思つて切つていたもう阿弥陀仏が「間違まちがひなく汝を引き受ける」と、私の助かることを信じ切つて下さっている、その阿弥陀仏のまことを仰ぐばかり聞けばかり)

○念仏者は「偉い者になるな」と言うことを、聞き間違まちがひをしている、何もかもあほ一になる。御法を聞く時はあほ一になり、世の中の事は賢くならねばならぬ。それを取り

違ちがひをしている。世の中の事はあほ一とあほ言うて、「御法」の事になると、ああでもない、こうでもない、賢くなる。「そのまま」と言う事は御慈悲の前に立つた時、立たされた時。社会に向つた時は気を付けて賢くならねばならぬのに。私は二つとも落第で、お恥はずかしい事であります。

(賢い者も愚かな者も、勝れた者も劣つた者も、大学者も凡人も、弥陀の本願の前では一樣にみな一文不智の愚者。愚者となつて、ただ本願を不思議と信じるほかはない。でなければ、万人が平等に助かる法とはいへぬ。しかるに自分の愚かさおろそが知れぬゆえ、ああでもないこうでもない賢くなつてならぬ。この世でどう生活するかは人知を大いに働かせねばならないが、「そのまま」で引き受ける」という不可思議なお慈悲の前では無知のあほ一で順うばかり)

○口が動う動ごいているだけ。添え物は必要でない。

(阿弥陀様は「そのまま口先で称えるばかりでよい、その外になにもいらぬ」との仰せ。この仰せのままに口が動う動ごいているだけ。そのほかに、私の心の善し悪しや心の明かると暗くらいに用事無し)

## 《住職雑感》

\*韓流ドラマも現代物あり、時代物ありで、結構面白い。時代物のドラマには倭寇が何度も登場する。高麗時代から朝鮮王朝にかけて倭寇が朝鮮半島にしばしば侵入し、半島の人たちを悩まし続けたことがよく分かる。秀吉は二回も朝鮮に侵略し、甚大な被害を与えているし、明治時代には半島を日本は支配した。日本は朝鮮半島の人たちにとつては油断ならない国に感じていると思う。また中国では、特に明の時代には倭寇が海岸地帯をしばしば襲つていて、明治以降、日本の侵略によつて大きな被害を受けた。朝鮮・韓国や中国にとつて日本は、未だに怖い国ではなからうか。日本の歴史上、朝鮮・韓国も中国も日本には一度も攻め入つていない。攻めて来たのは蒙古とアメリカである。(北朝鮮や中国は軍事を増大させ、いつ襲つてくるか分からないから、日本ももつと軍事を強めよ)という意見が日本では強いが、朝鮮半島や中国の方が日本の軍事に脅威を感じているのではなからうか。

## 《春季彼岸会法要》

三月二十二日(月)

午後二時始まり

## 《念佛寺永代経法要》

四月二十二日(木)

午後二時始まり